

父母の子育てへの感情はどのように異なるか 子ども・子育てに対する感情への規定因の検討

青山学院女子短期大学 菅野幸恵
白百合女子大学 田矢幸江
文京学院大学 柏木恵子

Positive and Negative Feelings towards their Children Differences between Mother and Father

Aoyama gakuin women's junior college SUGANO, Yukie
Shirayuri college TAYA, Yukie
Bunkyo gakuin university KASHIWAGI, Keiko

子育て期の夫婦 522 組を対象に子ども・子育てに対する肯定的および否定的感情にどのような要因が関連しているかについて、特に父母で要因の関連のあり方がどのように異なるのかに着目して検討した。分析の結果子ども・子育てへの感情に関連する要因は父母で異なっており、さらに、母親が働いているか否かによっても異なることが明らかとなった。母親では自分の人生はこのままでいいのかと不安になるという傾向がいずれの感情に対しても大きな影響力をもっていた。父親の場合、家庭への凝集性と子ども・子育てへの感情との関連がみられた。母親の就労との関連では、継続してフルタイムで働いている母親は、そうでない母親に比べると否定感が弱く、肯定感が強かった。また妻が無職の場合に夫婦間のギャップが大きいことが考えられた。

【キー・ワード】子どもや育児に対する感情，父母差，家族観，個人としての自己実現，夫婦関係，母親の就労

This study examined what factor relates to feelings towards their children and how the feelings differs between mother and father. Participants were 522 couples of childcare term. As a result, the factors relevant to the feelings differ between parents, and it became clear to differ by whether the mother is working or not. In the mother, the tendency of anxiety and irritation had big influence to the feelings. In the case of the father, it was found that the feelings to a child and child-rearing related to a home intention-tendency. The mother who is working full time continuously in connection with a mother's working had less negative feelings compared with the mother who is not so, and positive feelings were more. Moreover, in the case of housewives, it was possible that the gap between husband and wife is large.

【Key Words】 Feelings toward child and childrearing, Differences between mother and father, Relationships of couple, Working mothers

問 題

最近，“子育て”に対する社会の関心は高まっていると言える。少子化，子ども虐待，育児不安などの子育てに関連する言葉がメディアに登場する機会も多くなっているし，“子育て支援”という言葉が耳にすることも多くなった。このように子育てに社会の注目が集まることの理由のひとつとして，子育てのネガティブな側面が明らかになってきたことが挙げられる。虐待や強い育児不安という極端なものでもなく，若い母親の育児に対する負担感が増えているという報告がなされており（大日向，1996；菅原，1999），育児不安や育児ストレスに着目した研究も多くなされている（牧野，1982；佐藤ら，1994；田中，1994，1997）。一方で子どもを産むこと自体への女性の意識も変わってきたと言われる。子どもを産む理由について尋ねた柏木・永久（1999）の調査では，若い世代（40代）の母親は60代の母親に比べ，社会的価値（「結婚したら子どもを持つのが普通」）を挙げるものが少なく，逆に条件や人手が揃ったことを挙げる傾向があったという。子どもを産むことへの意識の変化は現在子育て中の世代の親にはもっと強くみられるかもしれない。

本研究では，子育て中の親が子どもや育児に対してどのような感情を抱いているのか，またその感情はどのような要因によって規定されるのかについて検討する。子育て意識や子ども（子育て）の価値が以前と比べると随分と変化していると考えられる現状において，子育て中の親たちのもつ子どもや子育てに対する感情を検討することは重要であると考えられる。その結果を，子育て支援などを考える上での基礎的な資料にすることもできるだろう。また子どもや子育てに対する感情は，育児不安や育児ストレスなどのネガティブな側面だけでなく，子育てを通じて親自身が成長したと感じられる（柏木・若松，1994）ようなポジティブな側面があることも事実である。子どもや子育てについてどのように感じているのかについて検討するためには，ネガティブな側面だけではなく，子どもや子育てに対するポジティブな側面にも注目することが必要であろう。

さらにそのような子どもや子育てに対する感情は母親に限ったものではない。今や父親は重要な子育ての担い手である。しかし子育てに関する研究において，父親はサポート提供者など，主体的な存在としては扱われてこなかった。父親も育児の重要な担い手であると考えれば，父親自身が，子どもや子育てについてどのような感情を抱いているのかについて検討することも重要であろう。そこで本研究では子育て期の父母を対象とし，その違いについて検討していく。

子育て中の親の感じる子どもや子育てに対する感情は個人にのみ還元されるものではなく，社会の変化によるものも大きい。子育てに対する意識や子どもへの感情の変化は社会変動の流れのなかでとらえていかねばならないのだろう（柏木，1999）。そこで本研究では子どもや育児に対する感情が社会変動の流れに関連するさまざまな要因とどのように関連しているのかについて検討する。菅原（1999）は戦後の子育て環境の変化に関連する社会現象として，産業構造の変化，少子化，住居の郊外化，父親の家庭不在の4つの要因を挙げたが，本研究では親の感情に直接影響を与えるであろう要

因として、家族観、夫婦関係、個人としての自己実現、妻の職業形態およびライフパターン、夫の育児参加などを取り上げる。以下にその理由を述べる。

家族の成員が一体感より個人の時間を大切にようになってきたことは、社会学において「個人化する家族」(目黒, 1987)「個人単位の家族」(落合, 1997)として指摘され検討されている。そのような家族の一体感よりも個人としての「私」を重視する傾向は既婚女性において特にみられるという(永久, 2001)。そこで本研究では個人がどのように家族を位置づけているのかと子どもや子育てへの感情との関連について検討する。また家族という文脈の中だけではなく、「個」としての自分を重視する傾向として、「個人としての自己実現」を取り上げる。本研究では個人としての自己実現を「自分が感じる欲求の充足、および自分が抱く価値の実現のために行動し、それによって個人としての自分のありかたに対して、肯定的な認識・感情をもっている状態」と定義する。大日向(1996)は最近の母親の特徴として「母親も人間だ。自分を犠牲にしたくない。」と「子どもを愛せないこと」を「自分を大切にすること」のように主張することを挙げ、その傾向を憂慮している。大日向の指摘は個人化傾向のある側面が子どもや育児への感情にネガティブに影響していることを示しているとも考えられる。しかし、個人化の全ての側面がネガティブに働くのではなく、ある側面はポジティブな影響をもたらすことも考えられ、その点について検討する。夫婦関係の満足度や夫の育児参加の程度については、さまざまな先行研究で母親の感情や父親自身の感情に影響があることが分かっている(牧野, 1982; 住田, 1999; 菅野ら, 2001)。また、同様に妻の職業形態やライフパターンによって妻自身の感情だけでなく、夫自身の感情も異なることが分かっており(福丸ら, 1999)、本研究でも妻の職業形態やライフパターンに着目する。

以上のことから本研究では子どもや子育てに対する感情と上述の要因との関連について検討する。とくに父母でその要因の影響力がどのように異なるのかどうかについて着目していくことにする。

方 法

対象者

東京都近郊および愛知県の保育園および幼稚園計 10 園に通う 3, 4 歳児をもつ父母。

手続き

父親用、母親用それぞれの調査票を入れた封筒を園を通じて配布し、園で回収した。一部の園では返信用の切手を貼った封筒を用意し、郵送にて回収を行なった。夫婦のマッチングをするため、表紙にはあらかじめ母親票用・父親票用共通のナンバリングをした。回収はお互いのプライバシーを護るために別々の封筒で行なった。配布した調査票は 1147 組で、父親 540 名(回収率: 47%, うち有効回答数 531 通)、母親 628 通(回収率: 55%, 有効回答 615 通)であった。今回は夫婦それぞれの回答が揃っている 522 組のデータを分析の対象とする。

調査期間

2001 年 6 月 ~ 11 月

調査内容

「生活意識に関する調査」と題して、以下のような内容の調査を行った。 家族構成 自分専用のスペースの有無 家族/家族以外の人と一緒にいる時間、一人で過ごす時間(平日/休日) 家庭内の家事分担(15項目) 家族に関する価値観(12項目) 子ども・育児に対する感情(18項目) 家庭、社会、個人に対するエネルギー配分(2項目) 個人としての自己実現に関する尺度 夫婦関係の調和度 生活の諸側面に対する満足度(7項目) フェイスシート。

本研究ではこのうち、子ども・育児に対する感情を中心に分析を行う。尺度の構成や分析方法については結果で述べることにする。

結果と考察

1: 対象者の属性

分析対象となった父親の平均年齢は36.0歳(範囲23-55歳)、母親は32.3歳(23-46歳)であった。平均結婚年数は7.95年($SD=2.84$)。父親の職業は民間企業勤務が74.4%、家業・自営業が9.8%、公務員・教員が6%、専門職が4.2%で、母親の職業は、民間企業勤務が9.5%、公務員・教員が8.1%、家業・自営業が17.1%、専門職が14.2%である。母親の現在の職業形態とこれまでのライフパターンについてはTable1に示した。

対象者の教育歴は、父親は中学・高校・高専卒が41.4%、短大・専門学校卒が9.2%、大学・大学院卒が49%で、母親は中学・高校・高専卒が39.7%、短大・専門学校卒が43.3%、大学・大学院卒が15.9%であった。

家族形態は、核家族が425組(81.4%)で、子どもからみた祖父母が一人でも同居している三世代家族が97組(18.6%)であった。

Table1. 母親の現在の職業形態、およびこれまでのライフパターン

現在の職業形態	人数	(%)	ライフパターン	人数	(%)
フルタイム	75	(14.4)	結婚後継続してフルタイムで就労	51	(9.8)
			結婚退職後し、フルタイムで再就労	23	(4.4)
パートタイム	70	(13.4)	結婚後退職し、パートタイムで再就労	69	(13.2)
専業主婦	301	(57.7)	結婚後退職し、現在は無職	220	(42.1)
			結婚後働いたことがない	81	(15.5)

注) 週あたりの労働時間35時間以上のパートタイムはフルタイムとした

仕事内容が家業・自営、自由業、その他のものは除いた

フルタイム、パートタイムのうちひとりずつライフパターンが不明のものがいた

2：尺度の構成および分析方法

本研究で使用した尺度は以下の通りである。

子どもや育児に対する感情：柏木・若松（1994）、福丸ら（1999）などを参考に 18 項目から成る尺度を作成した。評定は 1.あてはまらない～5.あてはまるまでの 5 段階でもらった。父母のデータを合わせて、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、心理学的意味および負荷量から 3 因子 14 項目を選択した。その結果を Table2 に示した。第 1 因子は「子育てへの否定感」、第 2 因子は「子ども・子育てへの肯定感」、第 3 因子は「子どもとの一体感」と命名した。Table3 に各因子間の相関を示した。「子どもとの一体感」の信頼性が低かったことやより感情的な側面に着目するために、今回は「子育てへの否定感（以下否定感）」、「子ども・子育てへの肯定感（以下肯定感）」の二つを中心に検討していくことにする。

個人としての自己実現：「社会変動と家族・個人の生活・心理発達モデル」（柏木, 1998）を理論的根拠に「個人としての自己実現」尺度を作成した。Rosenberg（1965）、伊藤（1993）、平山（1999）、高木（2000）を参考に 20 項目から成る尺度を独自に作成した。因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、心理学的意味および負荷量から 3 因子を選択した。第 1 因子「不安・焦燥」（自分の人生はこのままでいいのかと不安になる）、第 2 因子「自己実現」（周りとは反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる）、第 3 因子「集団志向」（誰かといっしょでないときさみしくなってしまう）と命名した。

家族に対する価値観：数井・大野・柏木（1996）の調査項目の一部に、新たに項目を加えた 12 項目から成る尺度を作成し、5 件法で回答を求めた。因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、全ての因子に負荷の低い項目を除いて再び因子分析を行う手続きを繰り返した。最終的に残った 9 項目でバリマックス回転を行い、全ての項目が 3 つの因子のいずれか 1 つに .40 以上の負荷を持つ単純構造が得られた。3 因子の信頼性（内部一貫性）は、順に .58、.55、.58 とやや低かったが、項目の意味内容から因子構造の解釈は可能と考えた。第 1 因子は「家族を養うのは主に夫（父親）の責任だと思う」「性別役割分業は双方に無理がなくてよいと思う」「家庭の居心地がよいかどうかは、主に妻（母親）次第で決まるものだ」の 3 項目を平均し「性別分業」と命名した。第 2 因子は「食事は家族みんな一緒になくてもそれぞれの都合のよい時間・場所でとればよい」「休日は家族の一人一人が自分の好きなことをして過ごせばよい」等の 4 項目の負荷が高かった。得点を逆転する処理を行って「凝集性」と命名した。第 3 因子は「家の仕事は特に役割分担を定めず、できる人ができるときにするのがよい」「夫婦は家事・育児を共に担うのがよいと思う」の 2 項目を平均して「共同参画」と命名した。

分析では、以上の尺度についてそれぞれの因子に負荷量の高い項目の素点の平均を、下位尺度得点とした。

夫の育児参加の程度：家庭内の家事分担のうち「子どものしつけ」「子どもの身の回りの世話をする」「子どもの遊び相手になる」ことについて家族のなかでどのように分担しているかを全体を 10 として「自分」「配偶者」「親族」「購入外注」の割合を尋ねた。夫が自分が分担していると答えた値を、育児参加の程度を表す指標として使用した。3 項目の相関をみたところ、中程度の

相関が認められたので、3項目の平均を育児参加の得点とした。

夫婦関係の調和度：Nakagawa [Kazui], Teti, and Lamb (1992) が作成した Marital-Dyadic Adjustment Scale (MDAS) の一部を改変した 21 項目を使用した。

満足度：自分自身の生き方、配偶者、家庭、仕事（無職の場合は無職であることについて）どのくらい満足しているのかについて 100 点満点で満足度を記入してもらった。

Table2. 子ども・子育てへの感情尺度の因子分析

項目	因子		
	F1	F2	F3
	子育てへの 否定感	子ども・子育て への肯定感	子どもと の一体感
子育てが思い通りにいかず、イライラすることが多い	0.72	-0.05	-0.05
子どもから解放されたいと思う	0.53	-0.07	-0.15
私は親として不適格ではないかと感じる	0.52	-0.08	-0.07
子育てをしていると、世の中から取り残されていると思う	0.52	0.04	0.06
親であることに充実感を感じる	-0.16	0.70	-0.03
子育ては楽しい	-0.30	0.59	-0.07
親になって成長できた	-0.03	0.51	-0.09
子どもにとって私はかけがえのない存在である	0.12	0.51	0.01
子どもと一緒にいると心がなごむ	0.72	0.44	-0.02
子どもが私の分身である	0.25	0.27	0.52
子どもは私とは別の人格をもった存在である	-0.13	-0.08	0.48
子どもは私の夢を託す存在である	0.21	0.23	0.48
子どもは親の思い通りに育つものではない	-0.16	-0.20	0.47
私には私、子どもには子どもの世界がある	-0.26	-0.27	0.47
寄与率	20.08	8.58	6.63
α 係数	0.75	0.71	0.56

Table3. 因子間の相関係数

	否定感	肯定感	一体感
否定感			
肯定感	-0.38		
一体感	0.07	0.11	

3：属性との関連

まず、子ども・子育てへの否定感、肯定感が父母でどのように異なるかを t 検定により検討した (Figure1)。否定感にのみ両者の間に有意な差が認められた。この結果は柏木・若松 (1994) の結果と一致する。

次に、母親の現在の職業、ライフパターン、家族形態によって、否定感、肯定感の得点を父親、母親別に比較した (Table 4)。父親では、肯定感について配偶者の職業により有意な傾向が見られ、配偶者がパートタイムで働く父親 ($Mean=3.82, SD=0.74$) よりも配偶者が無職 (専業主婦) の父親 ($Mean=4.03, SD=0.64$) の方が肯定感が高い傾向があった。配偶者のライフパターンによる差はあるとは言えなかった。母親では、否定感、肯定感ともに、自身の職業による差が見られた。否定感では、フルタイムで働く母親 ($Mean=2.92, SD=0.77$) は、パートタイム ($Mean=3.23, SD=0.83$)、無職の母親 ($Mean=3.14, SD=0.77$) よりも否定感が弱く、逆に肯定感にはパートタイムで働く母親よりも強かった (フルタイム: $Mean=4.15, SD=0.66$, パート: $Mean=3.90, SD=0.55$)。またライフパターンによる差も見られた。結婚出産後も継続してフルタイムで働く母親 ($Mean=2.81, SD=0.75$) は、退職後再びパートタイムで働いている母親 ($Mean=3.22, SD=0.77$)、継続して無職の母親 ($Mean=3.2, SD=0.77$) よりも否定感が弱く、逆に肯定感には両者より高かった (フルタイム: $Mean=4.23, SD=0.60$, 再就職パート: $Mean=3.91, SD=0.53$, 継続無職: $Mean=3.93, SD=0.67$)。家族形態については差が見られなかった。

母親に関してみると、結婚後も継続してフルタイムで働いている母親は、子どもに対して肯定感を強く感じ、否定感は弱かった。一方、結婚後働いたことのない母親や、働いたとしてもパートタイムの母親は、肯定感が弱く、否定感が強いという結果となった。否定感因子の項目内容とあわせて考えると、専業主婦の場合子どもと二人きりの生活への閉塞感を感じやすくこのような結果になったと思われる。

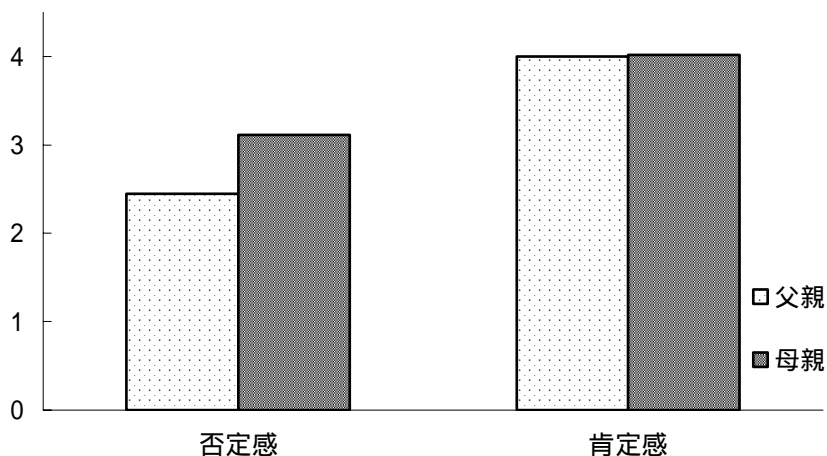


Figure1. 子どもや育児に対する感情の父母差

Table 4. 子ども・子育てへの感情と基本的属性との関連 T検定および一元配置分散分析の結果

		否定感			肯定感		
		t値 F値	sig.	多重比較	t値 F値	sig.	多重比較
性		-13.88	***	夫 < 妻	-0.56	ns	夫 > 妻
妻の職業形態	夫のみ			ns	2.98	†	専業主婦 > パート
	妻のみ	3.11	*	専業主婦 > フル パート > フル	3.01	*	パート < フル
妻のライフパターン	夫のみ			ns			ns
	妻のみ	2.48	*	継続フルタイム < 再就職パート 継続フルタイム < 継続無職	2.77	*	継続フルタイム > 再就職パート 継続フルタイム > 継続無職
家族形態	夫のみ			ns			ns
	妻のみ			ns			ns

注) 多重比較はターキー法を用いた。多重比較の有意水準は表示がないものはすべて 5%水準。

†: $p < .1$, *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

父親については妻の職業形態にのみ差が見られ、妻が専業主婦の場合に肯定感が高かった。母親の結果をあわせて考えると、結婚後働いたことのない母親は否定感が強く、肯定感が弱いにも関わらず、父親は傾向ではあるが妻が働いていない方が肯定感が強いというギャップが存在するということになる。

4: 子ども・子育てに対する感情を規定する要因

父母それぞれの否定感、肯定感はどのような要因によって規定されるのかについて検討した。個人としての自己実現、家族観の各因子および夫婦関係の調和度、母親の職業形態を独立変数として「否定感」「肯定感」それぞれを従属変数とする重回帰分析を父母それぞれについて行った。結果を Table 5 に示す。

肯定感から見ると、母親は「不安焦燥」「自己実現」「集団志向」「凝集性」に有意な関連がみられた。自分のやりたいことができていると感じている母親ほど子どもや育児に関しても肯定的に感じていることがわかった。一方父親では、「自己実現」「凝集性」「共同参画」「夫婦の調和度」に有意な関連がみられた。「自己実現」が影響力をもつことは母親と共通であるが、父親の場合、夫婦関係が調和していると感じられていることも肯定感の大きな要因になることが考えられた。

否定感では、母親は「不安焦燥」「夫婦の調和度」、父親は「不安焦燥」「凝集性」に関連が見られた。「不安焦燥」の高さが否定感に影響するということは父母ともに共通であるが、その他の要因として母親は「夫婦関係の調和度」、父親は「凝集性」と異なる要因の影響が認められた。

Table5. 「否定感」「肯定感」を従属変数とした重回帰分析の結果

	肯定感				否定感				
	母親		父親		母親		父親		
個人化	不安焦燥	-.30	***	-.05		.46	***	.42	***
	自己実現	.24	***	.25	***	.03		.06	
	集団志向	.15	***	.10	*	.07		.01	
	性別分業	.05		.11	*	.00		.03	
家族観	凝集性	.13	**	.20	***	-.04		-.22	***
	共同参画	.02		.14	**	.01		.02	
夫婦関係の調和度		.01		.21	***	-.13	**	-.09	†
父親自身の認識する育児参加		-.06		.10	*	.00		-.07	
母親の職業の有無		.01		.05		.04		-.07	
R ²		.21		.33		.27		.26	

表中の値は標準偏回帰係数

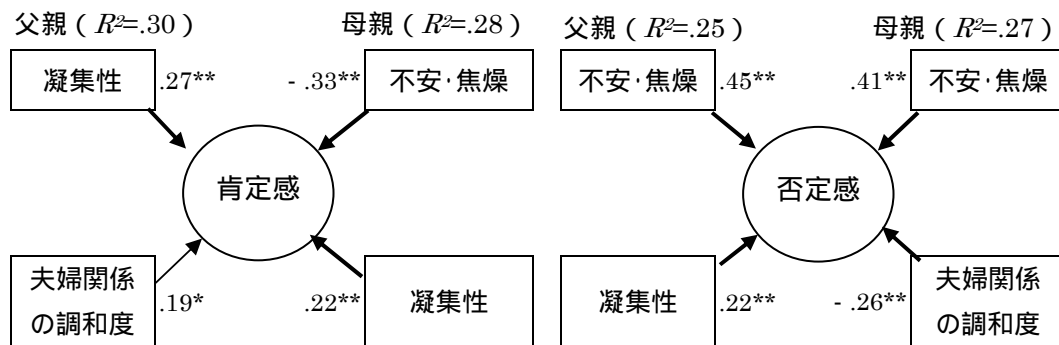
†: $p < .1$, *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

要因別に見てみると、「夫婦の調和度」の影響のあり方が父母で異なることがわかる。父親では、夫婦が調和していると感じられるほど子どもや子育てを肯定的にとらえることができるが、母親の場合子どもや子育てに対して肯定的かどうかには夫婦関係は影響せず、否定感に影響していた。つまり、夫婦が調和していると感じられる母親ほど否定感が低いという結果となった。「父親の育児参加の程度」は父親の肯定感にわずかに影響しているのみで、母親の子ども・子育てへの感情への影響は認められなかった。先行研究でも育児への夫の実質的なサポートよりも、母親への情緒的サポートや育児に対する理解度の方が母親の精神的健康に影響するということが述べられておりその結果と一致する(田中, 1994; 菅野ら, 2001)。また母親では「不安焦燥」がいずれの感情に対しても大きな影響力をもっていた。子育て中の母親が社会から取り残されていると感じることは育児不安の研究からも明らかとなっており、その気持ちの表れであるといえるかもしれない。「凝集性」は母親の否定感を除くすべての感情との関連が見られた。特に父親では家族志向的な傾向が子どもや子育てに対する感情にプラスに働くことを意味しているのかもしれない。

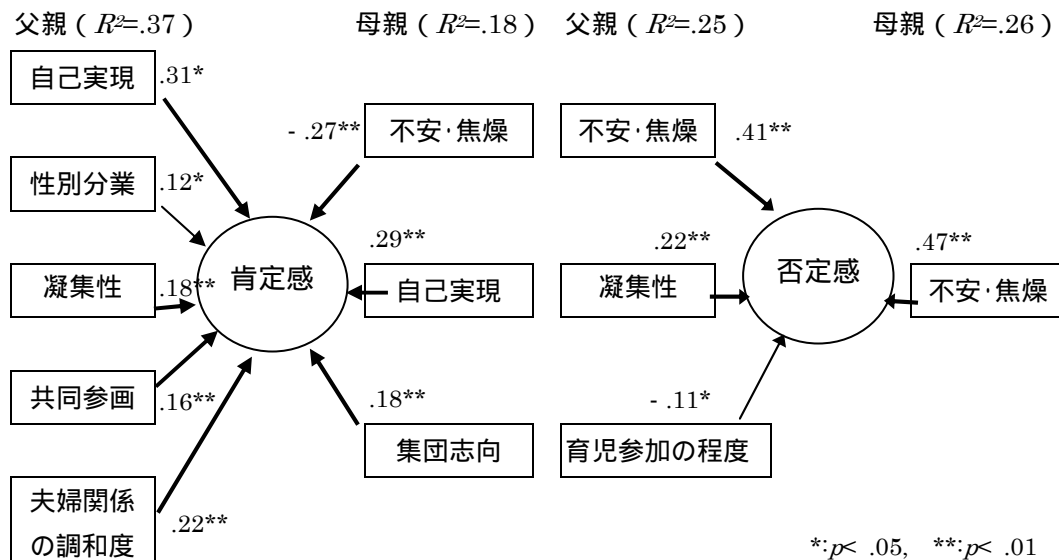
つぎに母親の職業の有無別に重回帰分析を行った。結果を Figure2 に示した。

特徴的なところに注目すると、有職の母親は夫婦関係の調和度と否定感との関連が見られたが、無職の母親では夫婦関係の調和度と子どもや子育てへの感情との間に関連は見られなかった。また無職群の母親は「集団志向」が肯定感、否定感(否定感との関連は有意傾向で、標準化回帰係数=.09)双方と関連をもっており、誰かと一緒にいることに対する安心感が一方では子どもや子育てへの肯定感と関連し、もう一方で子育てへの否定感と関連しているというアンビバレントな印象をうける。また「父親の育児参加」は妻が無職の夫の場合にのみ関連していた。またここでも「不安焦燥」は職業の有無に関わらず母親の感情に関連していたが、無職の場合、「不安焦燥」のみが否定感に関連してい

<妻が有職>



<妻が無職>



*: $p < .05$, **: $p < .01$

Figure2 . 母親の職業の有無別にみた重回帰分析の結果

注) 矢印上下の値は標準偏回帰変数

た。「不安焦燥」の値を職業形態によって比較すると、フルタイムと専業主婦のあいだに有意な差が見られ ($F=5.12 (2,439) p<.01$), 無職の母親の「不安焦燥」の高さがうかがえ、そのことが子どもに対する感情にも影響していると考えられた。

5 : 満足度との関連

否定感、肯定感は満足度とどのような関係にあるのかについて、肯定感、否定感の得点を父親母親別母親の職業の有無別に満足度との関係をみた (Table6)。母親は職業の有無に関わらず、肯定感、否定感が満足度と関連しているが、父親は、肯定感については満足度との関連が見られたが、否定感については満足度との関連はあまりみられなかった。特に無職群の父親の否定感自分の生き方に関連するのみであった。

Table6. 満足度と子ども・子育てに対する感情の関連

	母親				父親			
	無職		有職		妻が無職		妻が有職	
	否定感	肯定感	否定感	肯定感	否定感	肯定感	否定感	肯定感
自分の生き方	-.35**	.33**	-.29**	.37**	-.14*	.25**	-.31**	.29**
配偶者	-.21**	.14*	-.29**	.21**	-.04	.24**	-.14	.27**
家庭	-.37**	.36**	-.24**	.35**	-.09	.31**	-.27**	.41**
仕事(有職のみ)	-	-	-.17*	-.18*	-.07	.21**	-.23**	.15
無職(無職のみ)	-.20**	.13*	-	-	-	-	-	-

*: $p < .05$, **: $p < .01$

全体的考察

子ども・子育てに対する感情にどのような要因が関連しているかについて父母差に着目して検討した。子ども・子育てへの感情に関連する要因は父母で異なっていた。さらに、母親が働いているか否かによっても異なることが明らかとなった。母親の場合、自分の人生はこのままでいいのかと不安になるという不安焦燥の傾向が、職業の有無に関わらず子どもや子育てに対する感情に大きく関連していた。それは菅原(1999)が指摘しているような育児雑誌や新聞の投書欄にみることができる母親たちの叫びと通じるところがある。父親の場合には、旅行や外出などは家族揃ってという家族の凝集性を重視するような家庭志向的な傾向が、子どもや子育てへの感情に関連していた。家族へ関心を向けることがプラスに働くということなのかもしれない。

夫の育児参加, 夫婦関係

夫の育児参加の程度については父親の子どもや育児に対する肯定感との間にわずかに関連が見られただけで、あまり関連があるとはいえなかった。一方で、夫婦関係の調和度については父親の肯定感や母親の否定感との関連が見られた。しかし、父母で関係のあり方に違いが見られた。母親の場合には夫婦関係が調和していると感じられると、子育てに対する否定感は少なくなる。父親の場合には、夫婦関係が調和していると感じられると、子どもや子育てへの肯定感が強くなることが明らかとなった。夫婦関係の調和度が父親(夫)の場合には、子育てへの促進要因になるが、母親では否定的な気持ちや緩和する要因として働いていることが考えられる。

母親の就労, ライフパターン

母親(妻)の就労形態やライフパターンによって、母親自身の感情だけでなく、父親(夫)の感情にも違いが見られた。母親の場合、結婚後もフルタイム就労者として働いているものは、無職の母親やパートタイムで働いている母親よりも子育てに対する否定感が弱く、肯定感が強いという結果とな

った。関連する要因では、有職者の場合、不安感の低さ、家族と一緒に過ごすことを尊重すること、夫婦の間が調和していると感じられることが、子育てへの感情に影響していたが、無職の場合は自分のやりたいことができているという感覚や、不安感の低さが子育てへの感情に影響していた。有職の母親は、仕事を通して自分のやりたいことができているという実感があり、家庭（夫婦）志向的な傾向によって子育てへの肯定感を増すことができるが、無職の場合には自分のやりたいことができているという実感がもちづらいためにこのような結果になったのではと思われる。父親については、妻が無職の場合、父親は肯定感を感じやすく、育児に参加していると感じているほど否定感が低かった。妻が有職の場合は妻と同じような要因が関連しているのに、無職の場合には関連する要因も夫婦で異なっていた。妻が無職の場合にみられた夫婦の間のギャップが、無職の母親の否定的な気持ちにも関連しているのかもしれない。

子どもや子育てに対する感情に関係するもの

満足度との関連においても父母差が見られた。母親は職業の有無に関わらず、子どもや子育てへの感情と満足度との関連が見られたが、父親ではそうではなかった。とくに父親の否定感と満足度との関連が見られなかった。母親の場合、職業の有無に関わらず、自分の生き方や配偶者、家庭などに満足するということは、子どもや子育てに対してどのような感情をもっているのかについてと関連していた。しかし、父親の場合には自分の生き方や配偶者、家庭などに満足しているかどうかということと、子どもや子育てへの感情との関係は薄いという結果であった。つまり子育て以外の世界での影響力が強いということであろうか。特に妻が働いていない場合にそのような傾向が強いということは、子育てへの関与度の薄さがうかがえる。この結果を違う視点で見ると、母親の場合、子育てに満足できるかどうかによって生活のその他の側面にも影響を及ぼすということになる。つまり子育てがうまくいかないと感じれば、仕事も夫との関係もうまくいかないように感じられるかもしれないのである。しかし、父親の場合には子育てに満足できるかどうかは生活のほかの側面には影響しない。子育てがうまくいかないと感じたとしても、他の側面で同じように感じるとは限らないのである。

本研究では、子育て期の父母を対象として、子どもや子育てに対する感情と関連する要因について検討した。子どもの誕生からしばらくの間、母親はネガティブな自己概念を持ちやすいといわれる（Fleming, et.al, 1990）。今後は子どもの年齢が低い場合にはどうであるのかなどについて検討していく必要があるだろう。また本研究の結果、夫の育児参加と母親の子どもや子育てに対する感情との関連は見られなかった。今回扱わなかった夫以外の人のサポートがどのように関連するのかについても検討する必要があるかもしれない。

引用文献

- 伊藤美奈子. (1993). 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究. *教育心理学研究*, 41, 293-301.
- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎. (1999). 乳幼児期の子どもをもつ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関連. *発達心理学研究*, 10(3), 189-198.
- Fleming, A.S., Ruble, D.N., Flett, G.L. & Van Wanger, V. (1990). Adjustment in first-time mothers :

- Changes in mood content during the early postpartum months. *Developmental Psychology*, **26**,137-143.
- 平山順子.(1999). 育児期における専業主婦の個人化欲求:経済的資源へのアクセス志向性との関連を中心に. *発達研究*, **14**, 62-77.
- 柏木恵子・若松素子.(1994). 「親となる」ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, **5**(1), 72-83.
- 柏木恵子.(1998). 社会変動と家族発達. 柏木恵子(編), *結婚・家族の心理学*. (pp.1-50). 京都:ミネルヴァ書房.
- 柏木恵子.(1999). 社会変動と家族の変容・発達. 東洋・柏木恵子(編), *社会と家族の心理学*. (pp.9-15). 京都:ミネルヴァ書房.
- 柏木恵子・永久ひさ子.(1999). 女性における子どもの価値:今,なぜ子どもを産むか. *教育心理学研究*, **47**, 170-179.
- 数井みゆき・大野祥子・柏木恵子.(1996). 現代成人男女の家族意識. *1995年度東京女性財団助成事業年次報告書*. 62-63.
- 牧野カツ子.(1982). 乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>. *家庭教育研究所紀要*, **3**, 34-56.
- 目黒依子.(1987). *個人化する家族*. 東京:勁草書房.
- 永久ひさ子.(2001). 個人としての私. 伊藤美奈子・柏木恵子(編), *女性のライフデザインの心理*. 東京:大日本図書.
- Nakagawa [Kazui], M., Teti, D. M., Lamb, M. E. (1992). An ecological study of child-mother attachments among Japanese sojourners in the United States. *Developmental Psychology*, **28**, 584-592.
- 落合恵美子.(1997). *21世紀家族へ[新版]:家族の戦後体制の見かた・超えかた*. 東京:有斐閣.
- 大日向雅美.(1996). 子どもを愛せない最近の母親たち. 大日向雅美・佐藤達哉(編), *子育て不安・子育て支援*. 現代のエスプリ, 342. 至文堂.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self image*. Princeton: Princeton University Press.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則.(1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. *心理学研究*, **64**(6), 409-416.
- 菅野幸恵・白坂香弥・真栄城和美・繁多進.(2001). 乳幼児をもつ母親の意識と感情(2):母親たちのソーシャル・サポート・ネットワーク. *日本保育学会第54回大会発表論文集*, 878-879.
- 菅原ますみ.(1999). 子育てをめぐる母親の心理. 東洋・柏木恵子(編著), *社会と家族の心理学*. (pp.47-80). 京都:ミネルヴァ書房.
- 住田正樹.(1999). 母親の育児不安と夫婦関係. *子ども社会研究*, **5**, 3-20.
- 高木紀子・柏木恵子.(2000). 母親と娘の関係:夫との関係を中心に. *発達研究*, **15**, 79-94.
- 田中昭夫.(1994). 保育園児の母親への育児援助に対する基礎的研究. *保育学研究*, **32**, 107-115.
- 田中昭夫.(1997). 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究. *乳幼児教育学研究*, **6**, 57-64.

< 謝 辞 >

本調査の項目作成にあたり、中京大学教授古澤頼雄先生、お茶の水大学助教授伊藤美奈子先生にご助言を頂きました。また調査票の配布に関しまして名古屋市立大学後藤宗理先生、刈谷市教育委員会園茂子先生にご協力いただきました。その他調査実施にご協力くださいました各園の先生方にもお礼申し上げます。最後になりましたが、お忙しい中調査にご協力頂きましたお母さま方お父さま方に深く感謝致します。お子様方の健やかなご成長を心よりお祈りしております。

< 付 記 >

本研究は科学研究費基盤研究(B)(1)(課題番号:12410038)の助成をうけて行なったものである。